

5月の清溪小屋スキー行

塩澤 厚 (昭26入)

今年、2012年3月の清溪小屋での恒例のOBスキー合宿に参加した際は、積雪量が多く、今年の5月は大分快適に滑られる事を期待していた。

5月の連休を終えた7、8、9日の3日間、織方郁映さん（東大スキー山岳部OB、澤さんと二高同期）、佐藤正樹君（昭30入）と一緒に清溪小屋に出掛けた。遠刈田よりのタクシーの運ちゃんの話では、今年のエコーラインの除雪では高い所では20メートル程の雪壁が出来ていたと言っていたが、そんなものは全然見当たらなかった。



小屋で小憩後、シールを付けて金吹沢を横切って刈田峠の避難小屋に向かったが、やはり予想外に雪が少なくルートを探すのに苦勞した。例年ならばこんなに雪が融けて少なくなっていることは無いのだが、その前の週に東北地方を襲った豪雨のためとしか考えられない。小屋の付近で一月半で1メートル半以上は融けていると思われた。金吹沢のなかの表面に雨水による水流が流れた跡が歴然と残されているのは初めて見る光景であった。峠の避難小屋も土台までむき出しになり、積雪期の入り口についている鉄梯子は宙に浮いていて届かない状態であった。

そんなことで前杉の手前まで行ったものの、普段なら快適な滑降ができる前杉から峠の沢に落ちている斜面も断念せざるを得なかった。

予定では翌日、熊野岳から丸山沢を滑降するつもりであったが、こんな積雪の状況では丸山沢の F1 と F2 の口はかなり空いていて快適な滑りができないだろうと思った。佐藤君はだいぶ行きたかったようであったが、帰り道の「ひよどり越え」を登り、賽の碓を歩いて清溪小屋に戻るアルバイトを考えると、80歳を超えた織方さんや私にとってはかなりきつい事になるのでこれも断念した。

結局、翌日は刈田岳に登り、刈田の斜面から金吹沢の源頭に入って峠の方に行き前日のコースをたどって小屋に帰る、といった全く不本意なツアー一行に終わり、豪雨による融雪の凄まじさが身にしみた山行であった。



終